

ハムレットと『草枕』（1）

横山 郁子

Hamlet and Kusamakura (1)

Ikuko YOKOYAMA

Abstract

It has been frequently pointed out that Soseki Natsume's *Kusamakura* (The Three-Cornered World) is influenced in many ways by William Shakespeare's *Hamlet, Prince of Denmark*. The influence of the tragedy itself is obvious because the main character of *Kusamakura*, who is a painter, refers to Hamlet and Ophelia in some scenes. This article considers a possible influence of the famous painting of the drowning Ophelia by Sir John Everett Millais.

Keywords : *Hamlet, Kusamakura, Natsume Soseki, Ophelia, John Everett Millais*

序論

シェイクスピアの四大悲劇の一つ『ハムレット』が、夏目漱石の『草枕』に大きな影響を与えたことは、これまでも多く指摘されている。『草枕』の主人公である画工がハムレットやオフィーリアに言及する場面があることから、『ハムレット』という作品自体が影響を与えたことは明らかであるが、本論では、特にオフィーリア水死の場面を描いたミレーの絵による影響を考えてみたい。

絵画の中のオフィーリア

オフィーリアは、デンマーク宮廷の重臣であるポロニアスを父親に持ち、兄はフランス留学に出発、恋人は将来国王となるべき王子ハムレット、という順風満帆な人生を送っていたが、ハムレットの父王が急死し、その亡霊が仇をとるようハムレットに迫るあたりから雲行きがあやしくなる。亡霊の言うとおりの父親の敵として叔父クロードアスを殺すことにためらいを感じるハムレットは、狂気を装い、真実を知ろうとするのだが、その計画をオフィーリアにも明かさなかったため、父ポロニアスがハムレットに殺されたのは単にクロードアスと間違えたためということも知らず、オフィーリアに冷淡な態度をとるのも愛情がなくなったからではなく芝居だということもわからないまま、失意のうちに発狂して水死してしまう。この小川で亡くなる場面は、実際に舞台上で演じられることはなく、王妃ガートルードの台詞の中で様子が語られるだけである。

Queen. There is a willow grows askant the brook
That shows his hoary leaves in the glassy stream.
Therewith fantastic garlands did she make

Of crow-flowers, nettles, daisies, and long purples,
That liberal shepherds give a grosser name,
But our cold maids do dead men's fingers call them.
There on the pendent boughs her crownet weeds
Clamb'ring to hang, an envious sliver broke,
When down her weedy trophies and herself
Fell in the weeping brook. Her clothes spread wide,
Which time she chanted snatches of old lauds,
As one incapable of her own distress,
Or like a creature native and indued
Unto that element. But long it could not be
Till that her garments, heavy with their drink,
Pull'd the poor wretch from her melodious lay
To muddy death. (IV, vii. 165-181)¹⁾

王妃 小川のほとりに柳の木が斜めにに立ち、白い葉裏を流れに映しているところに、オフィーリアがきました、キンボウゲ、イラクサ、ヒナギク、それに口さがない羊飼いは卑しい名で呼び、清純な乙女たちは死人の指と名づけている紫蘭の花などを編み合わせた花冠を手にして。あの子がしだれ柳の枝にその花冠をかけようとよじ登ったとたんに、つれない枝は一瞬にして折れ、あの子は花を抱いたまま泣きさざめく流れにまっさかさま。裳裾は大きく広がってしばらくは人魚のように川面に浮かびながら古い歌をきれぎれに口ずさんでいました。まるでわが身に迫る死を知らぬげに、あるいは水のなかに生まれ、水のなかで育つもののように。だがそれもわずかなあいだ、身につけた服は水をふくんで重くなり、あわれにもその美しい声をもぎとって、川底の泥のなかへ引きずりこんでいきました。(第4幕第7場)²⁾

しかし、この場面は芸術家の創作意欲を刺激するらしく、多くの画家が題材として取り上げている。

ジョゼフ・セバーンは1831年頃、ローマで「オフィーリア」を描いたが、大きな特徴はオフィーリアが摘み取った花を並べて、HAMLETと綴っていることである。心変わりしてしまった(とオフィーリアは信じている)恋人に対する思いを表現したこのアイディアは、親交があったシェリーかキーツの着想ではないかとの指摘もある。³⁾

リチャード・レッドグレイヴの「花輪を編むオフィーリア」(1842年)は、小川のほとりで木の幹に腰かけ、題名通り膝の上で花輪を編む様子が描かれているが、白いドレスを着て頭に花輪をのせ、左手の薬指には結婚指輪に見立てたらしい緑色の葉か茎で拵えた指輪がはめられている。狂気の中で、ハムレットの花嫁になるという現実世界ではかなえられなかった夢をみているのだろうか。膝の上の花の中には、死のシンボルとして知られる芥子の花が見え、足元の川面には蓮の花が咲いている。迫りくる死を予感させると共に、せめて来世では夢がかなうようにとの画家の思いが込められているのかもしれない。

ジョージ・フレデリック・ワッツは、後に舞台でオフィーリア役を演じて高い評価を得たエレン・テリーをモデルに「オフィーリア」(1881-1882年グロヴナー・ギャラリーでの個展に出展)を描いた。「小川のほとりに柳の木が斜めに立」っているその大枝にもたれかかって小川をのぞきこむ構図であり、悲壮感に満ちた表情が印象的である。

ジョン・ウィリアム・ウォーターハウスの「オフィーリア」(1910年ロイヤル・アカデミーに展示)は、青いドレスを着て、摘んだ花を髪に飾り、手に花輪を持っている。右手をついている大きな木は、後に彼女の身体を支えきれなくなる柳の木であろう。

この他にも、ウジェーヌ・ドラクロワは、半身小川に浸かっている状態の「オフィーリアの死」を、アーサー・ヒューズは小川のほとりで花冠をかぶり手に花輪を抱える「オフィーリア」を描いている。

ミレーのオフィーリア

しかし、漱石が最も影響を受けたのはジョン・エバレット・ミレーの「オフィーリア」(1851-1852年、テイト・ギャラリー)だと思われる。(fig.1) この絵は、オフィーリアが小川に転落して亡くなる直前、「裳裾は大きく広がって / しばらくは人魚のように川面に浮かびながら / 古い歌をきれぎれに口ずさんで」いる場面、あるいは「身につけた服は水をふくんで重くなり、あわれにもその美しい声をもぎとって、川底の泥のなかへ引きずりこんで」いくまさに死の瞬間を描い

ているのが特徴である。オフィーリアの口がわずかに開いているのは、歌を口ずさんでいるからであろうか。

ミレーはラファエル前派を代表するイギリスの画家であり、歴史的・文学的な主題を細密な写実描写で表現した。

「オフィーリア」にもその特徴が表れており、現在も当時とほとんど変わらぬ状態で残っているサリー州ユーエルに近いホッグズミル川の風景は、水辺の植物が写實的に緻密な筆致で描かれている。描写されている花々には象徴的な意味が込められており、柳は見捨てられた愛、イラクサは苦悩、ヒナギクは無垢、パンジーは愛の虚しさ、首飾りのスマレは誠実・純潔・夭逝、ケシの花は死を表している。

モデルは、後に同じラファエル前派の画家ロセッティの妻となったエリザベス・シッダルであるが、彼女はロセッティに尽くすもののその愛情は報われず、精神疾患や流産といった不幸に次々見舞われ、アヘン・チンキやクラロールといった薬の乱用へと溺れていき、最後は半ば自殺のように大量の薬を飲んで、結婚からわずか2年後に若くして亡くなってしまった。その悲劇的な人生は、水＝涙に溺れて死んでしまう悲劇のヒロインを彷彿させ、彼女の中にオフィーリアに通じる不幸の影を感じ取ったミレーが彼女をモデルに選んだのではないかとの指摘もある。

また「自然に忠実」というラファエル前派の原理に従い、ミレーは彼女を湯を張った浴槽の中に浮かべ、下からランプで温めながら描いたと言われている。しかし創作に熱中するあまりランプを消してしまい(あるいはランプが消えたことに気づかず描き続けた結果)、彼女はひどい風邪をひいてしまい、彼女の父親は治療費を支払わなければミレーを裁判に訴えて罰金を払わせると怒鳴りこんだというエピソードが残っている。



Fig.1

漱石とミレーのオフィーリア

この絵をロンドンで漱石が見た可能性は高いと思われる。漱石は、明治33年9月8日(土)に横浜を発って以降、10月28日(日)晩にロンドンに到着するまでの滞在地も含めて、留学中に頻繁に美術館、博物館を訪れている。本人の日記に記録があるものだけでも次の通りである。

- 10月25日(木) (パリにて) 美術館を覧る。
- 10月27日(土) (パリにて) 博覧会を覧る。
- 11月 3日(土) British Museumを見る。
- 11月 5日(月) National Galleryを見る。
- 明治34年
- 1月29日(火) Water Colour Exhibitionを見る。
(中略) それより Portrait Galleryを見る。
- 2月 1日(金) Picture Galleryを見る。
- 3月27日(水) British Museum及びNational Galleryに至る。
- 4月 7日(日) South L. Art Galleryに至る。
- 6月22日(土) Earls CourtのExhibitionを見に行く。
- 9月 7日(土) National History Museumに至る。
- 10月13日(日) 土井氏と Kensington Museumに至る。

少なくとも、延べ13回にわたって足を運んだことが確認できる。

また、芸術に造詣が深い人物との関わりも多く、松本亦太郎(心理学者・美学者。のち京大・東大教授)、正木直彦(のち東京美術学校(現東京芸術大学)校長)、浅井忠(洋画家。京都高等工芸学校主席教授。文展審査員)、大塚保治(美学者。東大教授)らの名前が、共に美術館を訪れたり、手紙を送ったり受け取ったりした親交のある人物として、留学期間中の日記に挙げられている。

ミレーのオフィーリアに関して、漱石本人の日記には記述がないものの、見た可能性は高そうである。漱石がロンドンに到着する前、パリ滞在中に訪ねた相手として日記の中にも登場する浅井忠が、明治35年7月初めにパリからやってきており、漱石たちは浅井氏を案内してテート・ギャラリーに行っている。数々の名画を見ながら、蘊蓄を傾けた浅井画伯の説明を漱石は熱心に聴いていたそうである。⁴⁾

また、明治34年7月に漱石はロンドン留学中5番目(最後)の下宿、クラパム・コモン・チェース街にあるミス・リール方に転居しているが、ここに下宿している期間に、濃霧の中を「ギクトリヤで用を足して、テート書館の傍を河沿にパタシー迄」歩いた思い出を、後に『永日小品』の中で語っている。この時、単に傍らを歩いただけではなく、時には中に足を踏み入れて

展示されている作品を鑑賞したであろうことは想像に難くない。東北大学所蔵の『漱石文庫』にはテート・ギャラリーの目録が残されており、テート・ギャラリーに展示されている絵画について、漱石が自分の作品の登場人物に語らせていることから、そう考えるのが自然だと思われる。

『草枕』の中で画工は、温泉の湯につかりながら、ミレーのオフィーリアについて次のように考えをめぐらせている。

余は浴槽のふちに仰向の頭を支えて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂わして見た。ふわり、ふわりと魂がくらのげのように浮いている。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓帳をはずす。どうともせよと、温泉のなかで、温泉と同化してしまう。流れるもの程生きるに苦は入らぬ。流れるものなかに、魂まで流していれば、基督の御弟子となったより有難い。成程この調子で考えると、土左衛門は風流である。スウィンバーンの何とか云う詩に、女が水の底で往生して嬉しがっている感じを書いてあったと思う。余が平生から苦にしていた、ミレーのオフィーリアも、こう観察すると大分美しくなる。何であんな不愉快な所を扱んだものかと今まで不審に思っていたが、あれは矢張り画になるのだ。水に沈んだまま、或は沈んだり浮んだりしたまま、只そのままの姿で苦なしに流れる有様は美的に相違ない。それで兩岸にいろいろな草花をあしらって、水の色と流れていく人の顔の色と、衣服の色に、落ち着いた調和をとったなら、屹度画になるに相違ない。⁵⁾

すでに述べた通り、ミレーはモデルを浴槽の中に横たわらせて絵を描いた。温泉につかりながらオフィーリアの死の場面について考察する画工は、自らオフィーリア水死の疑似体験をしているとも考えられる。

さらに、漱石が帰国後、東京帝国大学でシェイクスピアの講義を始めた頃、明治36年12月に、ミレーのオフィーリアの絵の複製が、絵入り月刊美術雑誌『白百合』二号に掲載されている。漱石は、留学中に個人教授を受けた恩師ウィリアム・クレイグ氏が中心となって注をつけたアーデン版『ハムレット』のテキストを用いて講義を行っており、ハムレットのヒロイン、オフィーリアの絵が掲載されたこの雑誌にも興味を持って見た可能性が高い。⁶⁾

また、漱石は熊本に住んで3年目、明治31年頃に、妻の鏡子が自宅近くの白川井川淵に投身自殺を図り、網打ちの漁師に助けられたという経験をしている。その後しばらくは就寝の際に妻と手首に糸をつないで

いたというから、心配だったのだろう。この経験からも、水死の場면을写實的に描いているミレーのオフィーリアは、漱石にとって非常に印象的だったと考えられる。

ミレーのオフィーリアは『草枕』の中で、画工が言及するのみならず、ヒロイン那美の人物像形成などにも影響を及ぼしていると考えられる。

その具体的な影響については、次回考察を行うことにしたい。

注

- 1) 引用は、Harold Jenkins ed. *The Arden Shakespeare HAMLET*. London and New York: Methuen, 1982. に拠る。
- 2) 訳文は、小田島雄志『ハムレット』(白水社、1986)に拠る。
- 3) キーツとの親交を伝えるエピソードは多く、ジョセフ・セバーンのロイヤル・アカデミーへのデビュー作である「ハーミアとヘレナ」(1819)はキーツに薦められ『夏の夜の夢』を読んだから生まれた作品であり、肺結核を患ったキーツがローマに療養に行く祭には付き添い、最後まで看取っている。
- 4) 前田愛「世紀末と桃源郷『草枕』をめぐって」『坊ちゃん・草枕』、漱石作品論集成、第2巻、桜風社、1990年、262頁。
- 5) 夏目漱石『草枕』新潮社、1950年、90頁。
- 6) この絵は、『趣味』(明治40年3月号)、中村義一『近代日本美術の側面—明治洋画とイギリス美術』(造形社、1978年)にも紹介されている。

主要参考文献

- 1) Cook, Judith. *Women in Shakespeare* London: Harrap, 1980
- 2) 平岡敏夫(編)『漱石日記』岩波書店、2007年。
- 3) 仁木久恵『漱石の留学とハムレット—比較文学の視点から』リーベル出版、2001年。
- 4) 塚本利明『漱石と英国—留学体験と創作との間』彩流社、1987年。
- 5) 河村錠一郎(監修) *Shakespeare in Western Art* 東京新聞、1982年。
- 6) 平井富雄『神経症 夏目漱石』福武書店、1990年。
- 7) アト・ド・フリース(著) 山下主一郎(主幹)『イメージシンボル事典』大修館書店、1984年

(2011年11月7日 受理)